

文学館だより

令和 4年 6月 7日
若山牧水記念文学館
TEL 0982 - 68 - 9511
文 責 日 高

毎号、楽しみにしてくださっている皆さま、遅くなってしまい申し訳ございません。
坪谷は、田植えまっ盛りの季節となりました。

令和4年度 企画展変更のお知らせ

昨年4月から1年をかけて開催してまいりました「三浦家寄贈資料公開展 繁と敏夫－受け継がれた二人の絆」が5月をもって終了いたしました。寄贈資料391点は初めて見るものばかり。牧水を慕う三浦敏夫の生き方に改めて感じ入りました。寄贈いただいた資料は大切に保管するとともに、今後も多くの方々にお伝えすべく活用を図っていきたいと思います。

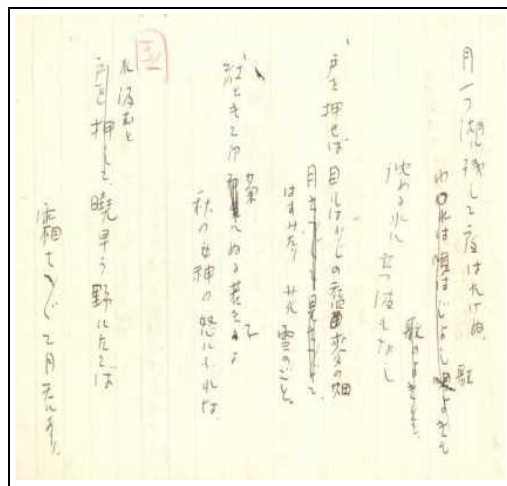
さて、今年度につきましては6月から『榎倉香邨作品展』を予定しておりましたが、日を改めて『榎倉香邨遺作展(仮題)』を開催することといたします。
よって、当初の計画を以下のように変更いたします。

企画展 文学ノート拝見

日時 令和4年6月5日(日)～7月10日(日)
場所 若山牧水記念文学館企画展示室

内容 牧水が延岡中学校時代(明治32年～明治37年在席)に書いたと思われる「文学ノート」。「文学ノート」原物と全ページを公開します。
「文学ノート」は黒万年筆で書かれ、青や赤で推敲を重ねた跡もそのまま残されています。

「文学ノート」 約12cm×19cm
短歌 277首
短い詩や俳句 57篇
長詩 5篇
散文 28篇



短歌と出会い、文学に心酔する延岡中学校時代の繁(牧水)に会える大変貴重な資料です。

7月以降の企画展等につきましては、随時、案内・報告いたします。

日 程	主 な 内 容
7月15日(金)～7月24日(日)	第26回若山牧水賞
7月31日(日)～9月30日(金)	榎倉香邨遺作展(仮題)
10月5日(木)～11月27日(日)	三浦家寄贈資料公開展総括(仮題)
12月4日(日)～2月26日(日)	第27回若山牧水賞
3月5日(日)～5月28日(日)	牧水全国歌碑めぐり

第26回若山牧水賞につきましては、延期されていた受賞歌人黒瀬珂瀾^{くろせからん}氏の授賞式はじめ関連行事の日程が決まりましたので、合わせて文学館でも企画いたします。

7月18日(月)	授賞式	受賞者	黒瀬 珂瀾 氏
		記念講演	伊藤 一彦先生
		会場	ニューウェルシティ宮崎
	受賞祝賀会	会場	ニューウェルシティ宮崎
7月19日(火)	牧水生家および文学館訪問		
	受賞記念講演会	第25回若山牧水賞受賞者	たにおか あき 谷岡 亜紀 氏
		「牧水の酒」	
		第26回若山牧水賞受賞者	黒瀬 珂瀾 氏
		「牧水の現代性」	

牧水生家がすっきり 坪谷小学校のみんな、ありがとう



5月19日(木) 坪谷小学校の皆さんが牧水生家清掃をしてくださいました。私も一緒にしようと思ひ、普段行き届いていない生家裏へ。何と先客あり。出番なく、私はしぶしぶ次の場所へ移動するのでした。

生家、夫婦歌碑周辺、裏山歌碑参道に分かれ、全校縦割りのグループで活動する児童たち。上級生が下級生に声をかけ、みんなで掃き、集める姿がとっても素敵でした。昨年の5年生は最上級生に。たった2ヶ月でこんなに変わるものかと頼もしく感じました。



尾鈴の山に向かって歌う坪谷っ子

活動の振り返りの最後は、尾鈴の山に向かって全員で牧水の歌斉唱です。

ほととぎす鳴くよと母に起されてすがる小窓の草月夜かな

掃き清められた生家で坪谷っ子たちの歌声を聞き、今回もまた胸いっぱいになってしまいました。坪谷小学校のみんな、ありがとう。今年もよろしく。

『 牧水株式会社 』 日向市立財光寺小学校6年1組 活動中！

坪谷小学校ばかりではありません。
日向市立財光寺小学校6年1組もがんばっています。

財光寺小学校6年生89名が見学に来られ、「牧水株式会社」が活動していることを聞き、インタビューしました。3人が社員さんです。



活動内容 毎月1首、クラスで短歌を作ってもらいます。
毎週水曜日、お昼の放送で の短歌を紹介しています。
(以前は、牧水の短歌を紹介していたこともあったそうです。)

誇らしげに話す3人の笑顔が印象的でした。彼らの活動は牧水を知るきっかけとなり、短歌を作ってみようかという刺激になること間違いなしです。1年経つ頃には全校から自作短歌が届くといいですね。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

親竹は伏し枝垂れつつ若竹は真直ぐに立ちて雨に打たるる

おやだけは ふししだれつつ わかたけは ますぐにたちて あめにうたるる

この歌は昭和3年初夏の頃の作で、この数ヶ月後に牧水は死を迎えることとなります。「『曇を憎む』と題するこの一連に表れたいらだった神経は牧水としてはまことに珍しいもので、はっきりとその健康状態を物語るものというべきであろう。」と、大悟法利雄氏は記しています。そのような中であって、この歌は気力が感じられ、親竹と若竹を親子にたとえた牧水の純粋な思いが込められているように思われます。

この歌群には次のような歌が収められています。

つばくらめ飛びかひ啼けりこの朝の狂ほしきばかり重き曇に
降るべくは降れ照るべくは照りいでよ今日の曇はわれを狂はしむ
けふ幾度(いくたび)顔を洗ひけむ晴れやらぬ心晴れよと願ふおもひに